「わが国の災害医療の現状と課題
―新たな防ぎえる災害死への取り組み―」

- 講師：大友　康裕 教授　（東京医科歯科大学大学院　救急災害医学分野）
- 日時：平成 27 年 9 月 30 日（水）17：30～
- 場所：医学教育図書棟 3 階　第 2 講義室

- Lecturer: Prof. Yasuhiro Otomo
  (Dept. of Acute Critical Care & Disaster Medicine,
  Graduate School of Medical & Dental Sciences,
  Tokyo Medical & Dental University)
- Date: September 30th (WED) from 17:30.
- Place: Lecture room 2, Medical Education & Library Building 3F.

わが国の災害医療体制は、阪神・淡路大震災で多くの「防ぎ得る災害死」を経験し、その教訓を基に、平成 8 年 5 月の厚生省健康政策局長通知によって、災害拠点病院の整備、広域災害・救急医療情報システム（Emergency Medical Information System：ＥＭＩＳ）の整備が進められ、さらに平成 16 年から、災害派遣医療チーム（ＤＭＡＴ）の整備が行われてきた。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災においては、多くの医療関係者が被災者の医療等に尽力した。災害発生直後からＥＭＩＳが活用され、ＤＭＡＴが全都道府県から被災４県へ派遣され、383 チーム、1,852 名の隊員が 12 日間に渡って活動した。また被災地の診療拠点として、多くの災害拠点病院が診療機能を維持し、患者を受け入れた。

その一方で、避難所または自宅に避難した方々のうち、過酷な環境から健康状態が急激に悪化し、命を落とす「災害関連死」が多発した。

災害時の「防ぎ得る死」を如何に最小限にするか、今後の課題について述べたい。

●担当：総合診療科学 笠岡 俊志 教授 / Prof. Kasaoka, Department of General Medicine

●レポート提出先/Essay（笠岡教授宛/To Prof. Kasaoka）：kasaoka@fc.kuh.kumamoto-u.ac.jp

●レポート提出先/Essay(CC:医学教務/Student Affairs Sec):iyg-igaku@jimu.kumamoto-u.ac.jp